

「抗炎症剤の選び方・使い方」第3版

水島 裕 柏崎禎夫

順天堂大学助教授・内科(膠原病)

橋 本 博 史

このたび、医学書院から「抗炎症剤の選び方・使い方—第3版」が出版された。この本は、本邦を代表する炎症学・リウマチ学の第一人者である聖マリアンナ医科大学水島裕教授と東京女子医科大学柏崎禎夫教授の肩のこらない対話形式で納められている。初版から8年の経過で3版5刷の改訂・発刊がなされ、これだけみても、いかにこの分野が著しい進歩を遂げているかがわかるが、近年の目覚ましい医学の進歩が炎症学、免疫学、リウマチ学にも大きく寄与していることが指摘されている。

解熱、鎮痛、抗炎症と、その使用目的はともあれ、抗炎症剤を使用しない臨床家はいないと言っても過言ではない。その使用範囲もさることながら、薬剤の種類も多く、また、drug delivery systemにより多種類の剤型と使用目的に応じた薬剤が開発されている。これらを十分に使いこなせることができれば、患者によ

り良い医療をもたらすことができるが、この本は患者に最も適した薬剤の選択と使い分けを懇切丁寧にわかりやすく解説している。

炎症に対して用いる場合には、炎症とは何かから始まり、炎症のstageを考慮に入れながら薬剤を選択する手法が述べられている。また、個々の疾患や病態の適用には、発症機序、病態生理などを踏まえて論理的に薬剤を選択する方法を解説している。

抗炎症剤に限らず、薬剤の功罪は薬効と副作用のバランスの上で評価されることが多い。更に人種差や個体差により薬剤の反応性に多様性をみる。幸いなことに、抗炎症剤は広義のもの(抗ヒスタミン剤、抗リウマチ剤、コルヒチンなど)、狭義のもの(非ステロイド抗炎症剤〈非ス剤〉、ステロイド剤)を含め種類が多く、特に非ス剤の選択の幅は広い。非ス剤の選択に際し、使いなれた系統の異なる薬剤を7種類ぐらい手持

ちにあれば患者の多様性に対応できる、など、成書には記載されていない実践的で示唆に富む話が随所に折り込まれている。金剤やD-ペニシラミンを含む抗リウマチ薬においては、成書に記載されている投与方法に固執することなく、効果がみられれば、個々の患者に見合ったさじ加減を必要とすることも多いことを指摘し、副作用、即、中止と短絡的に考えずに良薬を使いこなすノウハウについても触れている。

現在のところ、投与前に患者に合った薬剤を予知する方法はないが、将来の展望として、pharmacogeneticの分野の必要性を示唆している。そのほか、他剤併用時の具体的な留意点や能書の読み方にまで触れ、更には、ここ数年で実用化されるであろう第2、第3世代のプロドラックなど、将来の目指すところも指摘されている。

このように、本書は使用できる抗炎症剤があふれている中で、臨床医が最も求めている選択の仕方と使い方について、対話形式の長所を取り入れ、わかりやすく語られている。臨床医やリウマチ学を学ぶ医師のみならず、医療従事者や薬剤の開発、販売に携わっている方々にも一読をお薦めする。

A5判 236頁 1990年 定価
2,781円(税込) 送料300円